

1 問題

《中世西ヨーロッパの農民》

中世西ヨーロッパの封建領主の所領は荘園制によって経営され、その労働力となった農民の大部分は、移動の自由を持たず、^{★1}様々な身分的制約を受ける農奴であった。荘園制の成立期における西ヨーロッパでは、^{★2}領主の直営地における農奴の賦役労働が荘園経営の中心となっており、^{★3}自給自足の現物経済が支配的であった。しかし、11～12世紀になると、農業技術の革新や三圃制の普及などによって^{★4}農業生産力は飛躍的に向上し、都市や商業の発展を促した。

このような状況を踏まえ、13～16世紀頃の西ヨーロッパで見られた^{★5}農民の地位向上の過程について、^{★6}領主の荘園経営の変化と関連付けながら、200字以内で説明せよ。(25点)

ポイント

本問では、中世西ヨーロッパの農民について、中世社会の変質を意識しつつ説明することが求められている。

長い問題文が課されているが、解答を考える上での重要なヒントが随所に含まれているので、丁寧に読み込もう。問題の主要求は「農民の地位向上の過程」であるが、それに加えて「領主の荘園経営の変化」を明示しつつ、なおかつ両者の関連を意識した解答を作成する、という複雑な構成になっている。自分の解答を読み返し、問題文の要求をすべて満たした内容になっているか、よく確認してほしい。

解答

都市や商業の発展により貨幣経済が浸透すると、領主は賦役を廃止し直営地を農民に貸し与え、生産物や貨幣で地代を徴収した。余剰生産物を持って貨幣を蓄えた農民の中には解放金を払い農奴身分を脱する者も現れた。14世紀半ばには黒死病の流行により農村人口が激減し、領主は労働力確保のため農民の待遇改善を迫られた。困窮した領主は再び収奪を強めたが、農民は各地で農民一揆を起こして抵抗し、領主が譲歩して農奴解放が進んだ。(200字)

解法

思考のプロセス

まずは問題文に述べられている中世西ヨーロッパの状況を読み取ろう。

農民…^{★1}様々な身分的制約を受ける農奴 (★1)

荘園経営…^{★2}領主の直営地における農奴の賦役労働が中心 (★2)

経済…^{★3}自給自足の現物経済が支配的 (★3)

→ 11～12世紀になると、^{★4}農業生産力の向上によって都市や商業の発展が促された (★4)

★4から生じた西ヨーロッパの社会・経済の新たな展開を踏まえて、★5・★6で示した問題文の要求「農民の地位向上の過程」と「領主の荘園経営の変化」について考察していけばよい。

都市や商業の発展により、中世西ヨーロッパの経済は、^{★4}それまでの自給自足の現物経済から貨幣経済へと移行していった。このことが農民の地位向上および領主の荘園経営が変化していく最大の要因となったことを、解答で明示したい。

「過程」や「経緯」を問う問題の場合、どの時期から書き始め、どの時期までで書き終えるか明らかにして解答を作成することが定石であるが、本問の場合にはこれらを明確に定めにくいいため、**農民の地位向上の要因と、地位向上にとくに大きな影響を与えた出来事**を中心に述べていくとよいだろう。

解答の組立て

解答の主軸となる要素は以下の通りである。

- ①都市や商業の発展により貨幣経済が浸透
 - 領主が賦役を廃止して貨幣で地代を徴収する
 - 農民は余剰生産物を持って貨幣を蓄える
- ②14世紀半ばの黒死病の流行により農村人口が激減
 - 領主は（労働力確保のため）農民の待遇を改善
- ③領主が再び収奪を強めたことに対し、各地で農民一揆が起こる
 - 農奴解放が進む

農民の地位を向上させる画期となった出来事である①～③を軸として、関連する事項を適宜補足しながらまとめる。問題文のもう1つの要求である「領主の荘園経営の変化」については、①にあるように、賦役労働が中心の経営から、**貨幣地代を中心とした経営に変化したこと**を示せばよい。変化前の状況については、問題文にあらかじめ明示されていることから、解答で必ずしも述べる必要はないだろう。

解説

中世初期の西ヨーロッパでは**自給自足経済**が一般的であり、その生産単位は領主が**農奴**と呼ばれる半自由身分の農民を使役して経営する**古典荘園**であった。古典荘園は大きく分けて領主直営地、農民保有地、共同利用地の3つの部分から成り、農奴の**賦役労働**によって耕作される直営地が荘園経営の中心となった。また、農奴は家族・住居・農具などの所有は認められたが、移転の自由はなく、領主裁判権に服さねばならなかった上に、賦役（労働地代）や貢納、結婚税・死亡税など、領主に対する様々な義務を負っていた。

11～12世紀における農業生産力の向上と、それに伴う商業・都市の発展は、十字軍以後の遠隔地商業の発展と相まって、西ヨーロッパ社会に**貨幣経済の浸透**をもたらした。これに伴って貨幣収入を望むようになった領主は、直営地での**賦役を廃止**し、直営地を分割し農奴に貸与して耕作させ、収穫した生産物の一部を地代として徴収するようになった。また、**生産物地代**とともに**貨幣地代**も普及していった。このようにして成立したのが**地代荘園**（純粹荘園）である。

それまでの負担の中心であった賦役が軽減・廃止されたため、農民の領主に対する隷属関係は薄れるとともに、農民は**余剰生産物**を都市の市場で売却するようになり、貨幣を貯蓄する機会を得て、経済的地位を向上させ

🔍ここもチェック

農民は教会には十分の一税を納めた。

📌補足

生産物地代は定率地代であり、農奴にも取り分が残されていたことから、労働意欲が高かった。

ていった。とくに貨幣地代が普及したイギリスでは、農民は貨幣を蓄えて領主に解放金を支払い、農奴身分から解放されてヨーマンと呼ばれる**独立自営農民**となることも多かった。

西ヨーロッパでは、1340年代後半をピークに**黒死病**（ペスト）が大流行し、イギリス・フランスでは人口の約3分の1が病死したとされる。このため、領主直営地では労働力不足が深刻化し、**領主は労働力確保のために農民に有利な条件を認めざるを得なくなり**、農民の待遇は一層改善されていった。しかし、その結果、経営難に陥って困窮した領主は、再び農民の負担を重くして対処しようとした（**封建反動**）。これに対して、農民は強く反発し、村落共同体のつながりを基盤として、しばしば一揆を起こして抵抗した。このようにして発生した農民一揆としては、フランスのジャックリーの乱（1358）や、イギリスのワット=タイラーの乱（1381）がとくに有名である。これらの反乱は領主側によって鎮圧されたものの、領主から地位向上についての譲歩を引き出すこととなり、西ヨーロッパでは**農奴解放**が進んでいった。

▼古典荘園と地代荘園における地代

◎古典荘園

領主の直営地での**賦役=労働地代**

↓

◎地代荘園（純粹荘園）

直営地を分割して農民に貸与

- 賦役は廃止へ
- 生産物地代・貨幣地代を徴収

◀ **プラスα**

独立自営農民のうち、富裕な者は農村で毛織物業などを営み、イギリスの中産階級をなした。